

## + 1 2 【やこうちゅう】

大山にのぼると海が見えます。

遠くから見る海はいつも静かです。

大山にのぼることはめったにないのだけれども、大山のてっぺん近くにご先祖様のお墓があるので、一年に一回だけ母親と一緒に、三時間以上かけてのぼります。

お墓参りをして帰るころはだいぶ暗くなっていました。

海のほうを見ると、不気味なほど美しく青白い光が、いくつもいくつも見えます。

「あれはなんじゃ」

と母親にきくと、

「夜光虫だよ」

とこたえます。

ぼくは【やこうちゅう】はおばけにちがいないとかんがえました。

「きわめて美しい花には棘も毒もある」

と懐爺がいていましたから、(きわめて美しい光にも棘や毒があるはずだ)とかんがえたのです。

それで母親に、

「おばけじゃ、おばけのひかりじゃ」

というと、

「おばけではないけど、夜光虫は赤潮をつくって、害を与えるから、おばけみたいなものかもしれないね」

と母親は説明しました。

ぼくは、「おばけみたいなもの」と「おばけ」のちがいが解らないので、翌日懐爺のところに行きました。

「【やこうちゅう】はおばけかい、おばけみたいなものかい」

「夜光虫はおばけみたいなものですが、夜光注はおばけですよ。夜光虫はちっちゃな虫ですが、夜光注は巨大な虫のおばけです」

懐爺の説明は解りにくいものでした。

「おなじ【やこうちゅう】たあ、ややこしいのう」

「だいじょうぶです。もう大昔に、おばけの夜光注は退治されてしまっ

て、いまはおばけみたいな夜光虫がいるのみですから、ややこしくはありません」

やっぱり解りにくい。

「そうかのう。おおむかしにうまれりゃよかったのう」

「いやあ、そのころはこの村の人たちは奴隷（どれい）同然のあつかいだったでしょう」

それならいまでよかった。

「いったいどれくらいむかしなんじゃ」

一応きいてみました。

「具体的には、いまから一千一百年ほど前ですね」

「そらあ、まいったのう」

いくらなんでも昔すぎます。

「平安時代（へいあんじだい）といいます」

「ちっとも、へいあんじゃなのう」

「それなりに平安でした」

「そのおおむかしに、【やこうちゅう】をたいじしたのはだれじゃ」

「そのころは陰陽師（おんみょうじ）という、おばけ退治の仕事をする人たちがいました。その陰陽師が退治したんです」

「【おんみょうじ】たあ、おばけみたいななまえじゃのう」

「さすがは金ちゃん。おばけ退治の陰陽師たちのなかにも、おばけがいたんですよ」

おばけを退治できるのは、やはりおばけかとおもわれました。

すると懐爺も、おばけなのかとおもわれました。

「やっぱりのう。おばけの【おんみょうじ】が、おばけの【やこうちゅう】をたいじしたんじゃないな。そのありさまを、はなしてくれんかのう」

懐爺は珍しく、素直に首を縦にふりました。

きっと懐爺も【おんみょうじ】の【やこうちゅう】退治については、喋りたかったのでしょう。

（それとも）

ぼくは、何かかんじるところがありました。

（もしかすると）

懐爺は、その陰陽師の子孫なのではないかとかんじたのでした。

「あるとき羅城門（らじょうもん）というところに、たくさんの人間の死体があって、その中空に青白い光が見えるというので、陰陽師たちのなかで一番おぼけの世界にくわしいというか、おぼけの世界にはいりこんでいる或る【おんみょうじ】が、帝（みかど）から特別に選ばれたんです。その光はきっと【やこうちゅう】という魔物（まもの）で、その魔物はもともとは青鬼が死にそうなときに吐く、青息でしたからね」

「【おんみょうじ】はどうやって、たいじをしたのかのう」

「いつもは読経とか祈祷で退治するのですが、【やこうちゅう】は鬼そのものではなく、その鬼の靈魂（れいこん）といったもので、金ちゃんに解りやすくいうなら、おぼけのおぼけでして、おぼけのおぼけには、なかなか読経も祈祷も通じません」

ちっとも解りやすくありません。

でも一千一百年前の話だから仕方ない。

「おぼけのおぼけは、そんなにおそろしいんか」

「そうでもないです。生きた人間は食べないで、死んだ人間ばかり食べるのですから」

「そらあやっぱり、おそろしいのう。しんだにんげんだってくわれるのはいやだからのう」

「まあそうですが、そうでない気もしますが」

懐爺は口ごもりました。

「はやく、さきをはなせや」

「はいはい。それでその【おんみょうじ】がとった方法とは、つまり自爆（じばく）ですね」

「じばくたあ、なんじゃ」

いまなら毎日耳にする言葉ですけれど、そのころは初めてきく言葉でした。

「相手を殺して自分も死ぬという方法です。神風特別攻撃隊（かみかぜとくべつこうげきたい）ですね」

「そんなむかしから、かみかぜがあったんかい」

神風は自爆とはいわなかったはずだけれども、言葉の綾（あや）というものでしょうから、そのへんは追求しませんでした。

「はい。【おんみょうじ】はためらうことなくおのれのからだに火をつけ

て、死体の山に飛び込んだのです。凄まじい炎があがり、あがり、あがり続け、その炎で【やこうちゅう】も哭き喚きながら、とうとう焼け死んでしまったのです」

どうしてそこまでやるのか、懐爺は、【やこうちゅう】が悲惨(ひさん)に焼け死ぬ有様を熱演しました。

鳴鳴鳴鳴鳴鳴

非非非非非非

窮窮窮窮窮窮

罵罵罵罵罵罵

ぼくは何だか武者震い(むしゃぶるい)がしました。

「どうしてためらわないんじゃ。わしならためらうがのう。ためらうのがにんげんじゃからのう」

「ですから、その【おんみょうじ】はおばけなんです。おばけだから、いやもしかすると、帝に選ばれたときからおばけになったのかもしれない」

「わしもみかどにえらばれたら、おばけになるんかのう」

「たぶん」

「たぶんかのう」

「おそらく」

「おそらくかのう」

「きっと」

「きっとかのう」

「ぜったいに」

「ぜったいに、なるんかのう」

ぼくはなぜか満足して帰りました。